

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				観ル	コメント
66 オニシベツ 鬼志別 (猿払村)	地区 川	オニウシベツ	< o-ni-us-pet >	木の繁りたる川 <川尻に・樹が・群生している・川>	<ただし現在は森林らしいものは見えない。>	上原 <山田>	C	①〇 ②〇 ③－ ④ どちらとも判断しがたい。
		オヌウシベツ	{ o-nu-us-pet }	川口・豊漁・ある・川	上記の他、この解もあり得る。	駅名		①〇 ②〇 ③－ ④
67 オニワキ 鬼脇 (利尻富士町)	地区 山岳	オンネイワクイ *オンネイワキ	< onne-iwak-i >	老たる者の在る所 <老いたる(大きい) ・住んでいる・所>	<あるいは「大きい住地」、「もとからの住地」のような意味だったのでもあろうか。>	蝦夷 <山田>	C	①〇 ②－ ③ ④
68 オネトマナイ (稚内市)	地区 川	オネツオマブ *オネトマブ	< o-net-oma-p >	流木のある所 <川尻に・流木・ある・もの(川)>	<語尾の p の代わりにナイ(nay 川)を入れて呼んでも同じことで、どっちでも使われたろう。その後の方の形が現在に残った。>	上原 <山田>	B	①〇 ②〇 ③－ ④
69 オプナイ 雄信内 (天塩町)	地区 川 駅	オヌブンナイ *オヌブンナイ	< o-nup-un-nay >	川尻に・原野・のある・川	<旧図を見るとヌヌナイであり、当時はウンを省いた形で o-nup-nay と呼んでいたのであろう。>	駅名 天塩 <山田>	A	①〇 ②〇 ③〇 ④〇
70 オビヒロ 帯広 (帯広市)	市 川 駅	オペレペレケブ	{ o-pere-perke-p }	陰部・いくつにも裂けている・者 川口が幾条にも分かれている川 {川尻・裂け・裂けている・もの}	その上部の音をとって、それに十勝平野の広大さにちなんで広の字を付けたものが帯広。 <おおらかなアイヌ時代は、娘(少女)をオペレケブ(o-perke-p 下の所が・割れている・者)の形で呼んだ。ふつうに使われ、むしろ愛情を感じさせる言葉だった。そのペレを繰り返して、川口が幾条にも分かれている帯広川をこう呼んだ。> [明治期の原野区画図には、帯広川下流域が幾筋にも分かれて乱流している姿が描かれているという。]	駅名 <山田>	B	①〇 ②〇 ③〇 ④? オペレペレケブの解自体は妥当性を感じさせるものではあるが、大地名でもあり、諸説ありそうである。
71 オピラ 小平 オピラシベ 小平薬 (小平町)	山岳 町 ダム 川 山岳	オピラウシベツ	< o-pira-us-pet >	川尻に・崖・ある・川	<小平薬川の川尻の所にインガルシ(inkar-us-i 眺める・いつもする・所)という山が突き出していて、その下が崖になっているのでこの名がついた。>	永田 <山田>	A	①〇 ②〇 ③〇 ④〇
72 オフユ 雄冬 (浜益村)	地区 山岳 岬	ウフイ	uhuy	燃える、焼ける	昔、ここに雷が落ちて近辺が焼けたため。 海岸の絶壁には赤い岩層が大きく、目立つように露呈している。それで uhuy という名で呼ばれたのではなかろうか。 [松浦氏は『西蝦夷地名考』で「赤岩にて焼き岩の如く見ゆる」と書いている。]	上原 山田	B	①〇 ②? ③ ④ ①〇 ②〇 ③〇 ④－ 山田解釈が自然なように思われる。
73 オプタテシケ (美瑛町)	山岳	オプタテシケ	op-ta-teske	槍が・そこで・はねかえった	山の神々の恋争いで、投げつけられた槍がそれではねかえったので、呼ばれるのだと伝えられる有名な山である。	山田	B	①〇 ②〇 ③－ ④

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				観測	コメント
74 オホロ 尾幌 (厚岸町)	地区 川 駅 山岳	オポロペツ	o-poro-pet	川尻の・大なる・川	—	永田 駅名 厚岸町史	B	①○ ②○ ③— ④
75 オヤス 小安 (戸井町)	地区	オヤウシイ *オヤウシ	< o-ya-us-i >	川尻の漁場 <川尻に・網が・ある・もの(川)>	—	永田 <山田>	B	①○ ②○ ③— ④
76 オヤフル 生振 (石狩市)	地区	オヤフル	{ oya-hur }	他の・丘	—	永田	C	①○ ②? ③ ④
			o-ya-hur	尻が・陸地(にしている)・丘	あるいは、このように解すべきかもしれない。とにかく旧石狩川が大きく回っていて袋のように包まれた姿の土地であった。根もとのくびれたような所を呼んだ名である。	山田		①○ ②— ③ ④
77 オヨチ 大誉地 (足寄町)	地区 川 駅	オヨチ	oyoci	熊が人を殺す{?}	熊の害が多いところだった。	永田	A	①? ②? ③ ④
		オイオツイ *オイオチ	< o-i-ot-i > ↓ < o-i-oci >	川のそばにヘビの多い所 <川尻(そこ)に・それが・多くいる ・もの(川)>	<恐ろしいもの、貴重なものを直接口でいうのをはばかって「それ」といったもので、熊であったり、蛇であったり、あるいは菱の実であったりする。この場合は熊か蛇らしい。> 蛇(マムシ)の多いところからでた。明治 33 年道庁の測量班も、マムシに悩まされたという。	駅名 <山田> 足寄 町史		①○ ②○ ③○ ④○ 「 o-i-oci 」解が妥当と思われる。
78 オホ 及部 (松前町)	川	オユウンペ	o-yu-un-pe	川尻に・温泉・ある・所	昔、温泉があったという。	永田	C	①○ ②? ③ ④
		オイオツペ	o-i-ot-pe	川尻に・それ(蛇、熊、魚等)が ・多くいる・もの(川)	現地で聞いてみたが温泉はない。もしかしたら、左のような形だったのかもしれない。	山田		①○ ②— ③ ④
79 オリカ 折川 (島牧村)	川	オリカンペツ	o-rikan-pet	川尻・柔らかい{?}・川	この川尻は深くて流れが強くないため。	永田	C	①? ②— ③ ④
80 オリト 折戸 (鹿部町)	川	—	—	—	折戸は諸所にある地名で、従来アイヌ語かとも書かれたが、だいたい丘から海岸に出てくる通路の所なので、「降り・所」からきた日本語地名であろう。	山田	C	
81 オロウエンシ リベツ ミソ 御園 (喜茂別町)	川 地区	オロウエンシ リベツ	oro-wen-sirpet	その中が・悪い・尻別川(の支流)	何で悪かったかは分からない。川の中が歩きにくいのもあったろうか。御園はオロウエン尻別川の上流の地名で、前のころは川名を下略して御路園(御老円とも)と呼んでいたが、いつの間にか中の路を省いて御園とし、読み方も「みその」となった。 {尻別川については別掲。}	山田	C	①○ ②— ③ ④

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				観測	コメント
82 オロフレ (登別市)	山岳 峠	オロフレペツ	oro-hure-pet	水中赤き川 〈その中が・赤い・川〉	〈現在名は白水川。現在は少しも赤くなく、むしろ白っぽい。山岳や峠はこの川の名を採って、和人が付けたものか。〉 〔白水川の川筋に「赤い川」と呼ぶ枝川があり、白水川に流入して、枝川の奥には、かつての日鉄鉱山があり、川床には鉄鉱石の成分が溶けだした赤褐色の水がにじみ出ているという。白水川の本流からは石灰分の白い水も溶けだして、現在は白色が勝っているが、かつては赤い水を多く流していた時もあったのかもしれない。〕	永田 〈山田〉	B	①〇 ②〇 ③- ④
83 オンネ 恩根 (津別町)	地区	オンネキキン	onne-kikin	大きい(方の)・キキン川	土地を流れるオンネキキン川から恩根木橋という字が当てられていたが、面倒な字だからであるからか、後略されて恩根ということになった。kikin はエゾウワミズザクラの実のこと。東支流のキキン川より大きいのでオンネと呼ばれた。	山田	A	①〇 ②〇 ③〇 ④〇
84 オンネ 温根 (根室市)	沼	オンネト	onne-to	大きい・沼	風蓮湖のすぐ東の沼。根室半島の根もとを南北にほとんどたち切るばかりの長沼である。	山田	A	①〇 ②〇 ③〇 ④〇
85 オンネ (根室市)	沼	オンネト	onne-to	大きい・沼	根室市街の東南には大小の数多くの沼が並んでいる。その一番東の大沼がオンネ沼で、根室半島の根もとの大沼と全く同じ形で温根沼とも書く。	山田	A	①〇 ②〇 ③〇 ④〇
86 オンネナイ 恩根内 (美深町)	駅	オンネナイ	onne-nay	年とった(大きい)・川	天塩川対岸のオンネナイという小川から出たものらしい。オンネは「主要な、大きい」とも使われるが、諸地のオンネナイは必ずしも大きい川でない。何かわけがあるのであろうが訳に苦しむ川名である。	山田	C	①〇 ②- ③ ④
87 オンネベツ 温根別 (士別市)	地区 川 ダム	オンネベツ	onne-pet	主たる(大きい)・川	onne-pet の意は書きにくい。主たる・川とでも訳すべきか。ここでは大・川といってもよい川である。	山田	A	①〇 ②〇 ③〇 ④〇
88 オンネベツ 遠音別 (斜里町)	地区 山岳	オンネベツ	onne-pet	大きい・川	遠音別川はこの辺では大きい川である。ただし onne は元来は「老いたる」の意。知里氏は地名ではポロとともに「親」と訳して来た。諸地の onne-pet(nay) は小さな川であることも多く、近距離に並んでいる場合もある。今後更に研究をして行きたい言葉。	山田	A	①〇 ②〇 ③〇 ④〇
89 オンネベツ (幌延町)	川	オンネベツ	onne-pet	主要な・川	onne の意味はここでもよく分からない。その辺の小流の中の中心的な川であるぐらいの意味だったろうか。	山田	C	①〇 ②- ③ ④
90 オンネユ 温根湯 (留辺蘂町)	地区 温泉	オンネユ	onne-yu	大温泉 〈大きい・温泉〉	〈ここは無加川の川中の岩蔭から実に豊富な温泉の湧く所で、付近の小温泉に対する意味でオンネといわれたのであろう。〉	永田 〈山田〉	A	①〇 ②〇 ③〇 ④〇

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				観ル	コメント
91 オンベツ音別 (音別町)	町 川 駅	オンペツ	on-pet	発酵する・川	オンは木の皮を水に浸し腐らすこと。ニレ皮を浸したところから名付けられた。	松浦	B	①○ ②○ ③ー ④
				腐川	この川へ上る魚は直に老るという。 [音別町史は、この川について「良質の水であり、往時樹木が茂っていた頃はなおさら清浄そのものであったと想像される。」ことから、この説を「肯定しがたい。」と書いている。]	永田		①○ ②? ③ ④
				川口がふさがる川 〈川尻・塞がる・川〉	〈土地の人に聞くと、この川は海がしけると、砂で川口が塞がるのだといわれる。元来が o-mu-pet であったが、水質の強い川だったので、後に on-pet と呼ばれるようになったのではないだろうか。〉 [音別町史は「音別海岸は全くの砂地で、しかも波打ち際から急に深くなり、また、一番奥まった地点のため、割合に波が高いところである。したがって、波に押された砂が高く積もり川口を塞ぐことになる。」として、この説を支持している。]	駅名 〈山田〉		①○ ②○ ③○ ④ー 駅名(山田)解に妥当性を感じる。

【カ】

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				観ル	コメント
1 カトリマ 貝取淵 (大成町)	地区 川 温泉	カイエウトウル	kaye-uturu	折岩の間 〈折る・の間〉	〈kaye はくだけ波のことというが、永田氏は「岩壁が折れている間」と書いた。土地の伝承によるものか。〉	永田 〈山田〉	C	①? ②? ③ ④
2 カウ 化雲 (東川町)	山岳	クワウンナイ	kuwa-un-nay	杖川	化雲岳の下のクワウンナイ川は陰しくて杖をつかなければ通れなかった。	永田	C	どちらとも特定しがたい。 ①○ ②○ ③○ ④ー
				狩杖・入る・沢	狩人の入る沢の意味。	知里 〈山田〉		
3 カエデ 楓 (夕張市)	地区 駅	—	—	—	付近に ^{カエデ} 楓が多いのでこう名づけたもの。	山田	A	①○ ②○ ③○ ④ー 和名と思われる。

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				観ル	コメント
4 カリマ 掛 澗 (砂原町)	駅	—	—	—	和人の地名で、「舟がかりする・入江」の意味なのだろう。	山 田	A	和名と思われる。
5 カク 角 田 (栗山町)	地区	—	—	—	栗山町は明治 21 年宮城県角田の旧藩士が入植した所で、故郷の名にちなんで明治 33 年角田村戸長役場を設立した。昭和 24 年栗山町と改名したが、角田の名は町の南部の字名として残った。	山 田	A	和名と思われる。
6 カクラ 神 楽 (旭川市)	地区 山岳	ヘツチェウシイ *ヘツチェウシ	hetce-us-i	ハヤ 囃し・つけている・所	ヘツチェは歌舞に合わせてヘイツ！ヘイツ！と囃すこと。この場所でいつも歌舞したのでこういう名がついた。昔の祭場だったと思われる。意識して神楽という地名が生れた。	知 里	B	①○ ②○ ③— ④
7 カツ 勝 納 (小樽市)	地区 川	アツナイ	〈 at-nay 〉	豊沢 〈アツマリの・川〉	アツマリ(at-tomari ニシン群集する泊)を訛ってカチトマリとなり、カチナイとなったもの。 〈アツマリという入江があって、そのそばに流れ込む川〈山田〉なので呼ばれたものか。〉	永 田	C	①○ ②? ③ ④
8 カツラ 桂 恋 (釧路市)	地区	カチロコイ	{?}	{?}	カチロコイとさえずる小鳥がいたためという。	上 原	C	①? ②— ③ ④
		カツラコイ	{?}	{?}	昔カツラコイ・チリという鳥が多くいたためという。	松 浦		①? ②— ③ ④
9 カク 川 汲 (南茅部町)	地区 川 温泉	カッコクウンイ *カッコクニ	{ kakkok-un-i }	カッコウ・いる・所	この地名は新冠、十勝、網走等にもあるが、全てこの鳥の名による。	永 田	C	①○ ②— ③ ④
		カックム	kakkum	ヒシヤク 柄杓	もしかしたら、カックムからきた名かもしれない。	山 田		①○ ②— ③ ④
10 カナ 金 山 (南富良野町)	地区 駅 ダム	—	—	—	この辺は砂金採りが多く入った所なので、金山と呼ばれるようになったのだという。 砂金の産地として知られていたため。	山 田 南富良野町史	A	和名と思われる。
11 カネラン (足寄町)	峠	—	—	—	昔陸別にいた豪雄なアイヌの首領カネランの名を採って、近年つけられた名だという。	山 田	A	人名と思われる。
12 カバト 樺 戸 (新十津川町)	川	カパト	kapato	コウホネ(水草の名)	この地の河沼にコウホネが多かったため。 〈水中に蓮根のような根茎があってそれを食用にしたのだという。〉 〔間宮図(1821 年)にはカバト川に沼が描かれているという。なお、新十津川百年史も同説をとっている。〕	永 田 〈山田〉	B	①○ ②○ ③— ④

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				観	コメント
13 カバリ 賀張 (門別町)	地区 川 山岳	カバラ	{ kapar }	薄い	この海岸が平磯であったため。 [新門別町史は「ふだんは良く見えないが、干潮の大きいときは平たい岩礁が連なって見え、アイヌの人たちはそうした岩にカバルと名付け、いつか訛ってカバリとなったのであろう。」と書いている。]	上原	B	①○ ②○ ③○ ④ー いずれにせよ、「平岩があった」ことが名の元と思われる。
		カバラウシイ *カバルシ	{ kapar-us-i }	暗礁 {薄い(岩が)・ついている・所}				
14 カフカ 香深 (礼文町)	地区	カフカイ	{ kap-kay ? }	波{?}・背負う	くどうしてその訳になるのか私には分からない。カブ(kap)はふつうは皮、カイ(kay)は砕ける、折れる、背負うで、どうも地名の形になりにくい。なお現在の香深は、漁場の移転かなにかで香深井の名がそこに移転したものらしい。今の香深はトンナイ(to-un-nay 沼・がある(に入る)・川であったろう)と呼ばれた場所である。	蝦夷 <山田>	C	①? ②ー ③ ④
15 カフトマ 兜沼 (豊富町)	川 駅 沼 公園	—	—	—	沼の形が兜の鍬形に似ているための称。 <なお、明治の地図ではペライサルトー(「 peray-sar-to 釣りをする・葎原の・沼」だろう)と書かれている。今でももうぐい魚が釣れるそうである。>	駅名 <山田>	A	和名と思われる。
16 カマヤ 釜谷 (戸井町)	地区	カマヤ	kama-ya	平たい岩・の岸	この海は岩盤がずっと出っ張っていて、一面低い岩だらけである。	山田	A	①○ ②○ ③○ ④○
17 カマヤ 釜谷 (木古内町)	地区	カマヤペツ	kama-ya-pet	扁磐川	ここに水底に板のような大岩がある川があった。	永田	B	①○ ②○ ③? ④ いずれにせよ「平岩があった」ことが名の元と思われる。 ①○ ②○ ③? ④
	駅	オカマヤウンペツ	{ o-kama-ya-un-pet }	川口に扁岩のある川 {川尻・平たい岩・岸・にある・川}	—	駅名		
18 カミイ 上磯 (上磯町)	町 駅	—	—	—	アイヌ語説もあるが、たぶん和名であろう。函館、亀田辺りの人が、上の方(西あるいは松前の方)の磯という意味で呼んでいたのではないか。	山田	C	和名と思われるが、アイヌ語起源説もある。不明としておきたい。
	ダム	—	—	—	北海道では古くから、東を下、西を上という習慣があり、函館を中心に西を上海岸、つまり、「上磯」と称されるようになったと伝えられているが、定かではない。	上磯町 H P		
19 カミカ 神丘 (今金町)	地区	—	—	—	イマヌエルと名付けられるキリスト教徒の集落があり、神のいる丘の意味から名付けられた。	駅名	A	和名と思われる。

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				観ル	コメント
20 か 加 上 川 (上川町)	町 駅	ペニウクル コタン	peni-un-kur-kotan	川上・の・人の・土地	左記の意識だとよく書かれるが、その意味の上川は明治の始めから上川盆地の総称である。石狩川の源流の土地なので、自分たちの土地は上川の中の上川だといってこの名を選んだのだろうか。	山 田	A	①〇 ②? ③ ④
	山岳	—	—	—				
21 かシ 和 上 士 幌 (上士幌町)	町	—	—	—	昭和6年士幌村から分村したとき、川の上流に位置するので、士幌母村名に「上」の字を冠した。	上 士 幌 町	A	「士幌」参照。
22 か ジ 神 路 (中川町)	地区	カムイルエサンイ *カムイルエサニ	kamuy-ru-e-san-i	神の・坂(路が・そこから ・浜に出る・所)	対岸(西岸)の大崖がこう呼ばれていたのを意識した名。天塩日誌はここについて「昔ここを通るとき、イナウ(木幣)を供えないと、落石があって下に行く船を砕いた。神威著しいので、イナウと煙草、米等をつまみつつ供えて上った」と書いた。	山 田	A	①〇 ②〇 ③〇 ④〇
23 かミナガワ 上 砂 川 (上砂川町)	町	—	—	—	パンケウタシナイ川上流が、砂川の上であるという意味で上砂川と呼ばれていたが、昭和 24 年その周辺の奈井江、歌志内等の一部を合わせて上砂川町ができた。	山 田	A	「砂川」参照。
24 かノ ケニ 上ノ国 (上ノ国町)	町 駅	—	—	—	足利時代、津軽安東氏に二派があって、上ノ国、下の国と称した。秋田野代の檜山館にいた上ノ国安東氏が北海道に渡って開いたのが上ノ国だという。その名前が残された地名のようである。	山 田	A	和名と思われる。
25 かミ フラノ 上 富 良 野 (上富良野町)	町	—	—	—	富良野は元来はその富良野川筋の名であるが、明治になって、富良野川から上の空知川上流部の広大な土地を富良野村とした。だがその後何回も分村、合併が繰り返され、富良野川上流を上富良野町とした。	山 田	A	「富良野」参照。
26 かミ ユベツ 上 湧 別 (上湧別町)	町	—	—	—	明治初期のころは湧別村であったが、明治 43 年下と上の二村に分かれた。下湧別村の方は後に改名して湧別町になったが、上湧別はその後の町名に引き継がれた。	山 田	A	「湧別」参照。
27 か ム イ 神 居 (旭川市)	地区 山岳 ダム	—	—	—	神居古潭にちなんだ名。 〔明治 23 年、神居村、旭川村、永山村の三村が誕生した際に、村域内のカムイコタンの漢字表記を下略して、神居村としたものと思われる。〕	山 田	A	「神居古潭」参照。
28 か ム イ 神 威 (枝幸町)	岬	カムイエトウ	kamuy-etu	神・岬	岩岬が海中に鋭く突き出している。アイヌ時代の神様は人の寄りつけないような崖の所がお好きだったらしい。	山 田	A	①〇 ②〇 ③〇 ④〇

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				観測	コメント
29 カムイ 神威 (浦河町)	山岳	カムイシリ ----- カムイヌプリ	kamuy-sir ----- kamuy-nupuri	神・山	東蝦夷日誌によれば山上に神社があったという。 深く畏敬された山であった。	山田	B	①〇 ②〇 ③〇 ④ー いずれにせよ、「神の山」と呼ばれていたものと思われる。
30 カムイ 神威 (積丹町)	岬	カムイエトウ	kamuy-etu	神・岬	僧帽をかぶったような大岩があり、アイヌはこれを崇拜してカムイとし、和人はこれをオカムイと呼び、岬名オカムイとなった。 〈岬の先の海中には岩礁が多く、また風波の荒れる所で、昔は大難所であった。海中に人の形の巨岩があって、それがカムイ(神)と呼ばれていた。アイヌ時代の舟は、このオカムイ様に捧げ物をして通過していたという。〉	永田 (山田)	A	①〇 ②〇 ③〇 ④〇
31 カムイエト (増毛町)	岬	カムイエトウ	kamuy-etu	神・岬	〈たいへんな大岩崖の岬で、やっぱり神様のいらっしゃる所だなと思った。北見の枝幸の北にもカムイエトウ(北見神威岬)があり、似たような岩岬である。積丹の神威岬も同様であった。〉	松浦 永田 (山田)	A	①〇 ②〇 ③〇 ④〇
32 カムイコタン 神居古潭 (旭川市)	地区 溪谷	カムイコタン	kamuy-kotan	神の・居所	アイヌ時代の神様は激流とか断崖のような人間の近寄りにくい所に、好んでいらっしゃった。人間はそこを通る時は恐れかしこんで過ぎなければならない。不謹慎な者はおとがめを受けるのは当然な場所なのである。同名の所が諸地にあった。 〔魔神とも鬼神とも訳されているニツネ・カムイ(nitne-kamuy)を文化神サマイクルが退治する伝説が伝わっているという。〕	山田	A	①〇 ②〇 ③〇 ④〇
33 カムイシリ 神居尻 (当別町)	山岳	カムイシリ	kamuy-sir	神・山	神居尻は当別川の奥の最も威厳にみちた姿の山である。これらと同形あるいは類形の山名が道内諸地に多い。	山田	A	①〇 ②〇 ③〇 ④〇
34 カムイヌプリ (弟子屈町)	山岳	カムイヌプリ	kamuy-nupuri	神・山	大きな噴火口が見える。アイヌ伝承では、オプタテシケヌプリから来た槍が刺さったので、神様が怒って抜け出して、国後島のチャチャヌプリの所に飛んで行ったのだという。	山田	A	①〇 ②〇 ③〇 ④〇
35 カムイロキ (足寄町)	山岳	カムイロクイ *カムイロキ	kamuy-rok-i	神座	熊が穴を掘り越年する所。	永田	A	①〇 ②〇 ③〇 ④ー ①〇 ②〇 ③〇 ④〇 山田解釈の方が自然と思われる。
				神が・座る・所	足寄側から眺めると霊山型の目立つ独立丘であり、ただ熊がいた所ではなく、霊場として崇敬された山であったに違いない。	山田		
36 カモイナイ 神恵内 (神恵内村)	村	カムイナイ	kamuy-nay	神・川	この辺は昔はフルウであるが今は神恵内と呼ぶ。北から市街へ流れる長屋の沢がたぶんカムイナイであって、それがこの所の名として神恵内となり、大地名化したのであろう。そのカムイは場所柄、熊だったかもしれない。	山田	B	①〇 ②〇 ③ー ④

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				観ル	コメント
37 かやヌマ 茅沼 (標茶町)	地区 駅	—	—	—	この付近一帯はカヤが群生する沼地で、地名はこれによったものである。	駅名	A	和名と思われる。
38 かやヌマ 茅沼 (泊村)	地区	—	—	—	日本語のカヤの潤ぐらいの名らしいが、松浦氏の前の紀行の再航蝦夷日誌では「カヤトマリ、夷人カヤノマベツと云」とあり、もしかしたらアイヌ語だったかもしれない。(カヤ「帆」というアイヌ語もあり、帆の形の岩や崖の所の地名に使われることも時々ある)。	山田	C	間宮図(1821年)にもカヤノマイとあり、アイヌ語だった可能性もある。
39 かか 狩勝 (南富良野町)	山岳 峠	—	—	—	道央と道東を結ぶ交通路の大動脈が越える所で、石狩と十勝の一字ずつを採った名。	山田	A	「石狩」、「十勝」参照。
40 かき 雁来 (札幌市)	地区	—	—	—	永田地名解は「ニレ樹あり、火災の為に枯れる。故に和人枯木と呼びたりしが今雁木村と称す。」と書いたが、札幌村史は、元來樹木繁茂の地でないから枯木説は誤りであろうと書いた。	山田	C	和名らしいが、今では意味が分からなくなっている。
41 かば 狩場 (瀬棚町)	山岳	カリンパウシ ヌプリ	karinpa-us-nupuri	サクラ・群生する・山	桜の木は karinpa-ni(桜の木の皮・の木)だが、地名の場合は ni を省略するのが普通。松浦氏は「かり場山今さかりなり桜花」と感激の歌を詠んだ。	山田	A	①〇 ②〇 ③〇 ④〇
42 かべつ 狩別 (猿払村)	川	カリペツ	kari-pet	曲がる・川	湿原の中を曲がり曲がって流れていた川なので、こう呼ばれていたのだろうか。 〔明治図には湿原中を蛇行する姿が画かれているという。〕	山田	A	①〇 ②〇 ③〇 ④〇
43 カルルス (登別市)	地区 温泉	—	—	—	欧州の有名な温泉場であるカルルスバードの名にちなみ付けた名。アイヌ時代の名はペンケユ(penke-yu 上の・温泉)で、登別温泉より上にあるという意味で呼ばれたのだという。	山田	A	現在地名については和名。
44 か シラ 川白 (神恵内村)	地区 岬	カパラシラ *カパツシラ	〈 kapar-sirar 〉 ↓ 〈 kapat-sirar 〉	薄磯 〈平べったい・岩〉	〈川白の海岸には平らな岩が広くついでいて、いわゆる千畳敷の所であった。現在相当大きな漁港岸壁ができていて、その平たい岩を土台にして埋め立てて作ったのという。元来はずいぶん広い平岩地帯だったらしい。〉	永田 〈山田〉	B	①〇 ②〇 ③〇 ④— いずれにせよ「平岩があった」ことが名の元と思われる。
		カパラウシ *カパルシ	〈 kapar-us-i 〉	〈平岩・ある・所〉	—			
45 カワルッ 川流布 (浦幌町)	地区 川 山岳	カパラフ	kapar-hup	平べったい・トドマツ	—	山田	C	①〇 ②— ③ ④ ①? ②— ③ ④
		カパル	kapar-u-p	平たい岩(の所)・にある{?} ・もの(川)	—			

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				観ル	コメント
46 カベツ 寒別 (倶知安町)	地区	ヌプリカウネツ *ヌプリカネツ	{ nupuri-ka-un -pet } ↓ { nupuri-kan-pet }	山・の上・に入っていく・川	ヌプリカネツ即ちヌプリ・カウネツの下部を採って名づけたものである。 {水源部が本倶登山に入っていく様子から名付けられたものだろうか。}	駅名	B	①○ ②○ ③- ④

【キ】

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				観ル	コメント
1 キウスナイ 黄臼内 (浦臼町)	地区 川	キナウシナイ	kina-us-nay	ガマ川 {草が・群生している・川}	く kina は草の総称であるが、この形の地名では si-kina (蒲)を指していることがよくあったらしい。その川べりで蒲の穂を摘んで土産に持ち帰ったこともあった。 {浦臼町史も同説をとり、「キナは萱とも解されているので、蒲や萱の多い川と考えてもよい。}と書いている。}	永田 <山田>	A	①○ ②○ ③○ ④○
2 キコナイ 木古内 (木古内町)	町 川 駅	リコナイ	{ ? -nay }	登る・沢	この沢の辺りが自然に高く上がっていたため。	上原	C	①? ②- ③ ④ ①○ ②- ③ ④
		リリオナイ *リロナイ	rir-o-nay	潮入り川 潮の差し入る川 {波・入れる・川}	— この沿岸は干満の差が大きいので、満潮の時に川に潮が逆流するため。	永田 駅名		
3 キヒヤマ 北檜山 (北檜山町)	町	—	—	—	松前藩時代、この辺に檜(実はヒバまたはアスナロという)の森林があり、南の檜山郡と続いた所なので、この名が付いたという。	山田	A	和名と思われる。
4 キヒロシマ 北広島 (北広島市)	市 駅	—	—	—	明治17年広島県人25戸が移住したのが始まりで、移住者の故郷にちなんだ名である。山陽本線の広島があるため、北広島駅と呼ぶことにした。	山田	A	和名と思われる。
5 キタミ 北見 (北見市)	市 駅 峠	—	—	—	前のころは野付牛 ^{ノツケウシ} { nup-kes 野・の端 が由来と思われる}と呼ばれていたが、昭和17年市制施行と同時に改称した。北見国の中央に位置し、商工業の中心をなしているための名であるという。なお、北見国は松浦武四郎が国名建議書の中で「常々この辺のことを北海岸と唱えていたので北の字を用い、快晴の日にはカラフトが見えるので北見などいかに…」と書いたのが採用されたもの。	山田	A	和名と思われる。
6 キタムラ 北村 (北村)	村	—	—	—	開拓功労者北村雄治の姓から採って付けたものであるという。	山田	A	和名と思われる。